

列王記第二 22 章 10 - 13 節 「律法と心の痛み」

1 A 宮の修繕

1 B キリストの体

2 B 補修の働き

2 A 律法の朗読

1 B 捕囚後の立て直し

2 B 自分の鏡

3 B 神の人の整え

3 A 衣裂き

1 B 心痛め

2 B 主の前のへりくだり

3 B 主の前の涙

本文

列王記第二 22 章を開いてください。今日は午後礼拝に、22-23 章を一節ずつ学びますが、今朝は 22 章 10-13 節を読みたいと思います。

10 ついで、書記シャファンは王に告げて、言った。「祭司ヒルキヤが私に一つの書物を渡してくれました。」そして、シャファンは王の前でそれを読み上げた。11 王は律法の書のことばを聞いたとき、自分の衣を裂いた。12 王は祭司ヒルキヤ、シャファンの子アヒカム、ミカヤの子アクボル、書記シャファン、王の家来アサヤに命じて言った。13 「行って、この見つかった書物のことばについて、私のため、民のため、ユダ全体のために、主のみこころを求めなさい。私たちの先祖が、この書物のことばに聞き従わず、すべて私たちについてしるされているとおりに行なわなかったため、私たちに向かって燃え上がった主の憤りは激しいから。」

私たちは、ユダにおける第二宗教改革を実行したヨシヤの生涯を読みます。私たちは前回、ヒゼキヤの生涯を学びました。彼が第一回目の宗教改革者です。ユダの人々が高き所で偶像礼拝をしていたのを彼は取り除きました。ところが、彼の死後、彼の子マナセはこれまでにない、忌まわしいことをユダ国で行いました。偶像礼拝を復活させただけでなく、主の宮の中に偶像を持ちこみ、乳幼児を火によって神々に捧げ、さらに拝まない者たちを殺していきました。それからマナセの死後、アモンが王となりましたが、彼も主の前に悪を行ないました。

アモンの子がヨシヤです。ヨシヤは、八歳という幼さで王となりました。主の目にかなうことを行なった、と 2 節

に書いてあります。そして彼は、マナセやアモンによってないがしろにされた神殿の修復を命じました。その工事をしている時に宮の中で律法を見つけたのです。それを大祭司が書記に託して、そして書記が王にそれを読み上げました。その時に、律法の言葉を聞いた時の姿が今、読んだところです。ヨシヤは衣を裂きました。それは、律法で命じられていることを全く行ってこなかったことに対する激しい心の痛み、また行ってはいけないと命じられていることを、ことごとく行って来たという悲しみ、そして主が、それゆえに呪いと災いをもたらすとされたことに対する恐れであります。

1 A 宮の修繕

ヨシヤは宮の修繕について命じるほど、主に対して熱心でありましたが、律法の言葉を聞いて来なかったのです。そして、読んで、また朗読するということが、一見単純に見えて、実はなおざりにされる営みである、と言えます。聖書を手元に持っているのと、実際に読むのでは大きな隔たりがあります。かつてはキリスト教国と言われたアメリカでは、80 パーセントの人が、聖書が家にあると答えています。一家に 4.4 冊はあると言われていいます。けれどもアメリカ人の 57 パーセントの人は、年に四回、聖書を開くか開かないかだそうです。そして週に、三・四回読むという人は 27 パーセントにとどまります。そして、聖書を読んでいないから、アメリカの道徳的退廃が起こっていると考えの人が結構多いのだそうです。それは正しい見方です。詩篇の著者は言いました。「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるのでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。

(119:9) 」ある人はこうも言いました。「聖書はあなたを罪から遠ざけ、罪はあなたを聖書から遠ざける。」聖書を持っていても、それを実際に自分の目で読み、または朗読を自分の耳で聞かなければ、人に変化をもたらすことはありません。

1 B キリストの体

ヨシヤの宗教改革は、律法の言葉を聞いて、その中身に衝撃を受けたことから始まっていますが、それでも彼が神殿の修復をしたいと願ったことは、すばらしい願いでした。そこは主がご自分の名を置くと約束されたところであり、ご自分の性質や栄光を現すところとして定められたところです。もちろん神はそのような小さな建物の中に収まる方ではありません。天の天でさえ、神を収めることはできないと、この神殿を建てたソロモンは告白しました。けれども、この方の御名によって、この神殿に向かって祈るならば、主はその祈りを聞いてください、という祈りをソロモンは捧げました。同じように新約聖書では、イエス・キリストが教会においてご自分の名を置き、その祈りを聞く、と言われます。復活されたイエス・キリストはどこにでもおられます。聖霊によってどこにでもおられますが、キリストを心のうちに宿している者たちが集まるところで、ご自身の栄光を現し、その者たちに祈りを聞くと約束してくださっています。

そこで、新約聖書では教会が、「キリストの体」と呼ばれています。キリストは頭であり、私たちは頭であるキリストにつながっているその体の各器官です。キリストが死んでくださった時に、古い自分もキリストと共に死に、甦られたときに自分もこの方の命にあって新しくされました。水のバプテスマがそれを象徴しています。そして、この方と結びついていると信じている者たちは、それぞれが体の器官なので、だれもあの人は要らないとは言えま

せん。また、自分が教会の中で要らない人間だ、という卑下もあり得ないのです。パウロはキリストの体、そして神殿になぞらえて、教会をこのように例えています。「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ 4:15-16）」教会は愛によって始まり、そして愛のうちに建てられます。互いが愛によって結ばれて、組み合わせられて、そしてキリストの御丈にまで成長します。

もし、教会というものの定義がこういうものでなければ、その人は自分自身が無駄に葛藤するでしょうし、また他の人々に重荷を負わせることになるでしょう。第二次世界大戦を勃発させたドイツのヒトラーがいたころ、そのナチスのしていることに抵抗した数少ない教会がありました。その指導者の一人、ディートリヒ・ボンヘフパーが言った言葉が次です。「クリスチャン共同体よりも、自分で夢に思い描いている共同体を愛する人は、クリスチャン共同体の破壊者となります。…そこですばらしい体験ができずに、また特に発見すべきものがなく、弱さや信仰の欠けや困難ばかりが目につくからと言って、自分が置かれているそのクリスチャンの交わりに対して、感謝することもなく、文句ばかり言い続けるなら、私たちはその交わりを育もうとしておられる神の働きを妨げることになるのです。」人の弱さや信仰の欠けを見て、文句を言っているのは、自分自身を傷つけ、また他の体の部分、そして自分が信じ、愛していると言っているキリストご自身を傷つけている行為です。なぜなら、私たちはキリストの体だからです。自分ではなく、神とキリスト、そして他者の益になることを追い求める時に、私たちは結び付けられ、組み合わせられていきます。

2 B 補修の働き

ヨシュアは、神殿の補修工事に従事しましたが、キリストの体も同じような働きがあります。すなわち、キリストの体に欠けたところを満たしていくという働きです。パウロがコロサイにある教会に対して、こう書きました。「ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。（コロサイ 1:24）」パウロは、キリストの苦しみに何か欠けたところがあった、ということをお話していません。そうではなく、キリストの苦しみを教会が体現するのに、パウロが受けた苦しみによって満たされるということをお話しています。キリスト者がキリストのために、そして他者のために苦しみを受ける時に、キリストが受けられた苦しみがその人を通して現れます。そこには自分の必要が満たされることよりも、それはキリストにある喜びのゆえに満たされているのであり、他者をキリストにあって満たしていくという姿勢の中に見出されるものです。

ですから、「キリスト者」に対して神はなぜ苦しみを許されるのか、という問いを受けることが多くありますが、答えは明瞭なのです。キリストの苦しみを体現するため、であります。それも、その個人だけでなく、教会全体が体現するのです。私がスクール・オブ・ミニストリーで教師であった、レイという牧師がいました。彼は内臓が悪くて天に召されました。教会の全てが祈りました。何人祈ったか、何時間の祈りがささげられたか知りません。

2 A 律法の朗読

ですから、キリストの体、教会はすばらしいところです。けれども、もし律法、あるいは真理の言葉なしにこれを建て上げようとするならば、強い葛藤を覚えるでしょう。先ほど読んだエペソ書には、こう書いてありました。「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができる（4:15）」真理、すなわち神の真理の言葉を語ります。その中でキリストへ向かって成長します。

1 B 捕囚後の立て直し

ヨシヤは、ユダのすべての人々、祭司と預言者、および、一般の民も主の宮のところに全員を集めました。そして、主の宮で発見された契約の書のことばを、「彼らに読み聞かせた（23:2）」とあります。そして、読み聞かせただけでなく、「主の前に契約を結び、主に従って歩み、心を尽くし、精神を尽くして、主の命令と、あかしと、おきてを守り、この書物にしるされているこの契約のことばを実行することを誓った。民もみな、この契約に加わった。（3節）」とあります。そして、これまでにない、ヒゼキヤ以上の宗教改革を断行します。

この方式は、ユダの民がバビロンに捕え移されて、七十年後に帰還した後にも受け継がれます。すなわち、律法を朗読するのです。そして単に朗読するだけでなく、はっきりと、理解できるように、解き明かすようにして読んでいきます。ネヘミヤ記 8 章には、国語の能力のある年齢に達した者は、男も女も学者エズラのところに集まって、夜明けから真昼まで律法の書に耳を傾けた、とあります。その時の様子を読んでみましょう。ネヘミヤ記 8 章 4-8 節です。「学者エズラは、このために作られた木の台の上に立った。彼のそばには、右手にマテイヤ、シエマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが立ち、左手にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシュム、ハシユバダナ、ゼカリヤ、メシュラムが立った。エズラはすべての民の面前で、その書を開いた。彼はすべての民よりも高い所にいたからである。彼がそれを開くと、民はみな立ち上がった。エズラが大いなる神、主をほめたたえ、民はみな、手を上げながら、「アーメン、アーメン。」と答えてひざまずき、地にひれ伏して主を礼拝した。ヨシヤア、バニ、シェレベヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、エホザバデ、ハナン、ペラヤなどレビ人たちは、民に律法を解き明かした。その間、民はそこに立っていた。彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。」律法の書をはっきりと読む、すなわちそれに何が書かれているのかを説明し、解き明かして読んでいった、ということです。

その中で、彼らは悲しくなってきました。泣いてしまいました。自分たちがいかに律法にそぐわないでいるかを悟ったからです。けれども、ネヘミヤもエズラも彼らを励ましたのです。その至らなさの悟りこそが、主を喜ぶことのできる始まりであります。「悲しんではならない。主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから。（8:10 別訳）」

2 B 自分の鏡

このように、神の律法、また神の命令の言葉は、私たちの姿を映し出す鏡であります。「みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一

心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。（ヤコブ 1:23-25）」

しばしば、電車の中で、鏡を見ながら身だしなみをしている女性がいますが、実はあれは霊的に、私たちがすべきことです。自分の生まれつきの姿、ありのままの姿は神の御言葉によらなければ見ることはできません。自分は見ている、分かっていると思いながら、その頼るところは、限りある自分の頭、また自分をしばしば騙す感情、また他人の意見や評価であります。しかし神の御言葉を見る時に、本当の自分が見えます。そして、ただ御言葉を聞いて、それだけで終わらせているならば、まさに身だしなみをしないで、寝る時まで鏡を見ないで過ごした女性と同じです。私たちが宣教地にいた時に、田舎から市内に向かうバスの中で、後ろの髪の毛がそのまま横に立っている女性を見て、私たちと親友が苦笑いしていたのを思い出します。まさに寝癖の髪の毛のまま外に出てきた感じです。けれども霊的に私たちが御言葉を聞いているだけで行わないなら、そのようになっているのです。

3 B 神の人の整え

そして聖書は、私たちが神の人として整え、良い働きをすることができる書物です。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。（2 テモテ 3:16-17）」聖書は神の靈感を受けた言葉であり、そして一つ目に教えがあります。神の真理があります。そして次に戒めがあります。「戒め」とは、その教えに照らして、あなたが誤っていると明らかにすることです。私はある時に、聖書をまっすぐに解き明かされる説教を聞いて、苦しくなり、悲しくなりました。周りの人々は同じ説教を聞いて、喜んでいるのです！なぜなのか？不思議に思いましたが、理由が分かりました。自分は戒めを嫌がっていたのです。他の人々は、自分に過ちが示されると、自分からキリストに思いを変えることができるので、その解放感によって喜んでいるのです。自分を肯定してもらうために御言葉があるのではなく、むしろ否定するためにあります。

そして、「矯正」です。これは正すことです。戒めによって過ちを示されたら、今度はその教えに合わせて正します。自分を正さないで来た、変えることに抵抗を覚える、という人は、聖書をいくら読んでも自分は変わらないでしょう。正すことを聖書は意図しているからです。そして、「義の訓練」であります。正した後に、その状態を保つための訓練であります。このことを繰り返すならば、すべての良い働きにふさわしい十分に整えられた者となります。

3 A 衣裂き

ヨシヤは、律法の言葉を聞いた時に、どのような反応をしたか、主が女預言者フルダによって語っておられます。22 章 19 節です。「あなたが、この場所とその住民について、これは恐怖となり、のろいとなると、わたしが言ったのを聞いたとき、あなたは心を痛み、主の前にへりくだり、自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。…主の御告げです…」

1 B 心痛め

彼が行ったのは、初めに「心を痛めた」ことでした。この言葉は、ダビデがサウルから逃げて、洞穴に隠れている時にサウルがそこにやってきて、彼の寝ているうちに彼の上着のすそをこっそり切り取った時にも使われています。「ダビデは・・・心を痛めた（1サムエル 24:5）」とあります。柔らかい心、罪に対して敏感な心です。罪に敏感な人ほど、自分は神にふさわしいものではない、という咎めを受けます。けれども、神は罪に敏感な人を愛しておられます。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。（ルカ 18:13）」と祈った取税人と同じ心です。この取税人が義と認められて家に帰った、とイエス様は言われます。主の真理に対して、心の柔らかい人ほど主は愛してくださいます。

2 B 主の前のへりくだり

そしてヨシヤは、主の前でへりくだりました。へりくだる、という言葉、あるいは謙虚という言葉は、日本語のそれと聖書のそれでは大きく異なります。日本語の謙虚は、人の前でへつらっている時が多いです。人に対しては自分を低くするのですが、神に対して低くしているかは分かりません。けれども聖書に出てくるのは、いつでも、主の權威に服する、主が語らえていることに服従する、自分の意志を屈して、主の前で頭を垂れる、という意味になります。「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くして下さるためです。（1ペテロ 5:6）」神の力強い御手が、へりくだりを理解する鍵です。人の前でへつらうのではなく、すべてのことが神から来ていることを認め、主に与えられている状況を甘受することです。ヨシヤの場合は、ユダが主に背いたので、神の呪いと裁きが来ることをそのまま受け入れました。神が正しく、自分たちに面目がないという姿勢です。

3 B 主の前の涙

そしてヨシヤは、主の前で泣きました。ヤコブは手紙でこう言いました。「あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。（4:9）」自分の罪に対して悲しみ、泣いていますか？それとも、祈りの時間を取らずに、他の人のせいになっているでしょうか？あるいは、自分の内で落ち込んでいるだけかもしれません。落ち込みも、自分のプライドを保つ一つの方法です。主の前に敢えて自分を裸にする時、心を広げる時、そして自分の罪を悔み、泣くときに、主は聖霊の甘い働きで、あなたのその傷を癒してくださいます。なぜなら、主がすでにその傷を代わりにむち打ちで受けてくださったからです。

ヨシヤのこのへりくだりによって、今にも下ろうとしていたユダに対する裁きは彼の生きている間には来ないように引き伸ばされました。ヨシヤは自分自身が神の前でへりくだっただけなのですが、それはユダの民の執り成しにもなっていたのです。私たちが主の前にへりくだる時に、み言葉によって自分の罪が明らかにされ、悔いて、泣いて、主の前に過ごす時に、癒しの御霊の流れは自分だけでなく他の人々にも伝播していきます。高慢な霊は周りの人を疲れさせますが、へりくだった霊は周りの人々も潤します。